266
(458)

高崎市文化財調査報告書第266集

三ッ寺・七窓遺跡

－共同宅地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2010

高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書第266集

三ッ寺・七窓遺跡

－共同宅地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2010

高崎市教育委員会

例　　言

1．本書は、共同宅地建設に伴う三ッ寺・七窓遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。

2．本遺跡は、群馬県高崎市三ッ寺町字七窓988番地１の一部、988番地２に所在している。

3．本調査および整理作業は、高崎市教育委員会が委託契約を締結した有限会社毛野考古学研究所の協力を得て実施した。

4．発掘調査の体制は、以下のとおりである。

　高崎市教育委員会　　田口一郎、角田真也

　有限会社毛野考古学研究所　　和久拓照

5．発掘調査・整理作業は、平成21年11月３日～平成22年４月30日の期間で実施した。

6．本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で458である。

7．本書の執筆については、Ｉを田口、それ以外を和久が行った。

8．本書に関わる資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。

9．発掘調査・整理作業に携わった方々は以下のとおりである。

【発掘調査】

井口ヒロ子　小出拓磨　狩野友好　竹生正明　永井述史　橋元裕児

【整理作業】

小出拓磨　真下弘美　渡辺博子

10．発掘調査の実施から報告書の刊行に至る過程で下記の機関のご協力を賜った。記して感謝申し上げます。(50音順、敬称略)

株式会社レオパレス21　山下工業株式会社

凡　　例

1．挿図中の北方位は座標北を、断面水準線数値は海抜標高を示す。座標は世界測地系を用いた。

2．遺構図および遺物実測図の縮尺については、図中にスケールを付して表示した。また、遺物写真は遺物実測図とほぼ同縮尺である。

3．遺構覆土および土器の色調観察は『新版 標準土色帖』(農林水産技術会議事務局　財団法人日本色彩研究所監修 2006)に従っている。

4．本書掲載の第１図は高崎市発行１/2,500「高崎市都市計画基本図」、第２図は国土交通省国土地理院発行１/25,000「室田」および「前橋」を使用した。

目　次

例言・凡例
目次・図版目次・表目次・写真図版目次
Ⅰ 調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ 地理的・歴史的環境 …… 2
　1．地理的環境 …… 2
　2．歴史的環境 …… 2
Ⅲ 調査の方法と経過 …… 3
　1．調査の方法 …… 3
　2．調査の経過 …… 3
Ⅳ 基本層序 …… 4
Ⅴ 検出された遺構と遺物 …… 6
　1．竪穴状遺構 …… 6
　2．土坑 …… 6
　3．遺構外出土遺物 …… 6
Ⅵ まとめ …… 10
写真図版
抄録・奥付

図版目次

第1図　調査区域図 …… 1
第2図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第3図　基本層序 …… 4
第4図　遺跡全体図 …… 5
第5図　1号竪穴状遺構 …… 7
第6図　1号竪穴状遺構 遺物分布図 …… 7
第7図　1号土坑 …… 7
第8図　出土遺物 …… 8

表目次

第1表　周辺の遺跡一覧表 …… 2
第2表　出土遺物観察表 …… 9

写真図版目次

PL.1　調査区全景（西から）
　基本層序（調査区北東隅、南西から）
　基本層序（調査区南西隅、北東から）
　基本層序（調査区北西隅、南東から）
　基本層序（調査区中央テストピット、南から）
PL.2　1号竪穴状遺構（南東から）
　1号竪穴状遺構 遺物出土状況(1)（南西から）
　1号竪穴状遺構 遺物出土状況(2)（南東から）
　1号土坑（南から）
　作業状況
PL.3　出土遺物

Ⅰ　調査に至る経緯

平成21年７月、塩野 大氏（以下事業者）より高崎市教育委員会（以下市教委）に共同宅地建設予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、該当地が古墳～中世に至る散布地として遺跡台帳・地図に登録された埋蔵文化財包蔵地であるため、工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

同年８月３日付けで、事業者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年９月８日に工事予定地の試掘調査を実施し、古墳時代の竪穴遺構を確認した。

試掘結果を受けて、埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、建設予定の変更は不可能ということなので、文化財保護法第93条第１項の規定による届出に対する回答で、記録保存の発掘調査が必要であると指示を出した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、有限会社毛野考古学研究所に委託して実施することとなり、平成21年10月30日付けで高崎市長・事業者・毛野考古学研究所の三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成21年11月２日付けで事業者と毛野考古学研究所の二者で発掘調査委託契約が締結された。

第１図　調査区域図

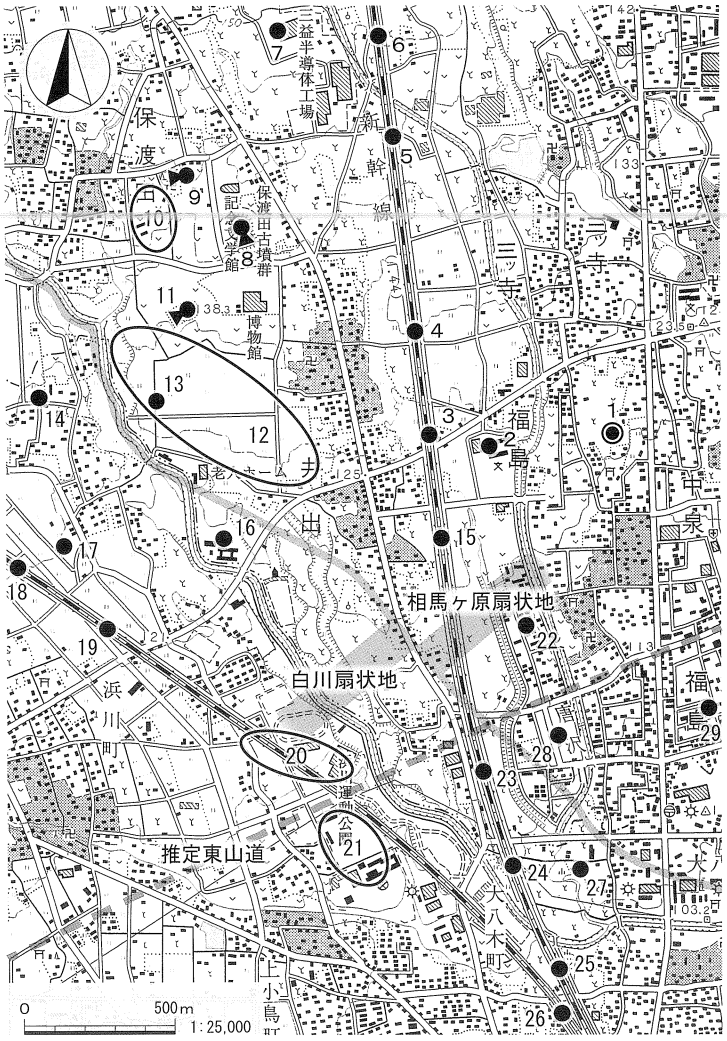
Ⅱ　地理的・歴史的環境

1．地理的環境

三ッ寺・七窓遺跡が所在する高崎市は群馬県のほぼ中央に位置し、北西に榛名山、北に小野子山と子持山、北東に赤城山を望む。市域においては、西部に岩野谷（観音山）丘陵と丘陵縁辺部の扇状地、烏川・碓氷川低地帯、北西部に若田・八幡台地、北部に相馬ヶ原扇状地、同扇状地の南に前橋台地がそれぞれ位置する。前橋台地の中央付近には段丘と谷底平野からなる井野川低地帯があり、同低地帯の西隣域は高崎台地と呼ばれる。本遺跡は、井野側左岸（東岸）に広がる相馬ヶ原扇状地の西端、微高地の一角に位置する。本遺跡の西約 1.2km には、箕郷町東明屋付近を上流端とする井野川が南東方向を指して流れている。遺跡地の現況は畑地で、周辺は民家と畑地が相半ばするが、近年は宅地化・市街化がいっそう進みつつある。遺跡地の現地表面は標高120.0～120.2 mを測り、北西から南東に向けごくわずかながら傾斜する。

2．歴史的環境

三ッ寺・七窓遺跡が位置する相馬ヶ原扇状地西部では、古墳時代および奈良・平安時代の遺跡が多数所在する。古墳時代中期後半～後期初頭に築造された保渡田古墳群（8・9、11）、首長層の居館跡が見つかった三ッ寺Ⅰ遺跡（3）



第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡

No.	遺　跡　名	主な時期・性格
1	三ッ寺・七窓遺跡	古墳中期集落跡
2	中林遺跡	古墳中期・平安集落跡、平安水田
3	三ッ寺Ⅰ遺跡	古墳後期～平安集落
4	三ッ寺Ⅱ遺跡	縄文前期住居、弥生後期～平安集落
5	三ッ寺Ⅲ遺跡	古墳後期～平安集落
6	保渡田遺跡	古墳後期～平安集落
7	保渡田東遺跡	奈良～平安集落
8	保渡田八幡塚古墳	５Ｃ末前方後円墳
9	保渡田薬師塚古墳	５Ｃ末前方後円墳
10	保渡田Ⅶ遺跡	古墳前期集落、保渡田古墳群関連の遺構群
11	井出二子山古墳	５Ｃ後半前方後円墳
12	井出地区遺跡群（Ａ区）	古墳・平安水田
13	北畑遺跡	古墳集落、同畠、同祭祀跡、古墳
14	道場遺跡	ＦＡ泥流埋没古墳
15	井出村東遺跡	弥生後期・古墳中期集落
16	同道遺跡	古墳・平安水田
17	高田・館遺跡	平安水田、中世館
18	浜川高田遺跡	古墳水田、水田祭祀跡
19	浜川館遺跡	古墳水田、水田祭祀跡
20	御布呂遺跡	古墳・平安水田
21	芦田貝戸遺跡	古墳・平安水田
22	西浦北遺跡	弥生後期集落
23	熊野堂Ⅰ遺跡	弥生後期～平安集落
24	熊野堂Ⅱ遺跡	弥生後期～古墳集落
25	大八木屋敷遺跡	古墳水田、平安集落
26	融通寺遺跡	弥生後期・平安集落、古墳・平安水田
27	雨壺遺跡	弥生中～後期集落
28	西浦南遺跡	弥生後期集落、同方形周溝墓
29	大八木箱田池遺跡	縄文中期集落

第１表　周辺の遺跡一覧表

は、両者が関連をもって存在したことをうかがわせる事例として著名である。また、井野側左岸（東岸）の低地では、古墳時代前期の早くから水田運営が行われていた痕跡が知られると同時に、さらに山寄りでの水田検出例が見当たらなくなり、この近辺が榛名山南西麓における水田開発の北限であったことを示唆している。近在かつほぼ同時期の集落遺跡例としては、本遺跡の約 200ｍ西に位置する中林遺跡（２）、南西約 700ｍの井出村東遺跡（15）が挙げられる。

なお、周辺各遺跡の報告書について、本編末尾に摘要をまとめた。各文献冒頭の番号表示は、第１表中の遺跡No.と同一のものを用いている。

Ⅲ　調査の方法と経過

１．調査の方法

表土除去にあたっては、遺構確認面であるAs－Ｃ混黒色土層（Ⅳ層）の上部まで、重機を用いて掘り下げることとした。その後は人力による遺構調査を進め、遺構確認にジョレン、精査には移植ゴテを主に用いた。

確認された遺構は、移植ゴテを使用して掘り下げた。今回確認された遺構は、いずれも調査区縁辺に位置し、一部が調査区外に広がるため、埋没状態や構築状態を調査区の壁面セクションにて観察した。

図面･写真による記録は、土層断面、遺物出土状況、完掘状況などの各段階で行った。遺構断面図は縮尺１/20を基本として 手実測で対応、平面図についてはトータルステーションを用い、整理調査において任意の縮尺に加工した。写真撮影には、35mm 白黒ネガ、35mm カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラを用いた。

２．調査の経過

現地での発掘調査は、平成 21 年 11月 ３日～同年 11 月 10 日の間で実施した。

11月 ３日：ＧＰＳによる基準点測量、および測量用基準杭の打設を行う。

11月 ４日：重機、仮設トイレ、および発掘機材各種の搬入。調査区東隅から、重機による表土掘削を開始。表土掘削がすんだ範囲から、ジョレンを用いての遺構確認作業を開始。試掘調査の所見に従い、Ⅳ層（As－Ｃ混黒色土層）上部を遺構確認面とする。

11月 ５日：重機による表土掘削が終了し、重機を回送。遺構確認作業を継続。試掘調査において住居跡とされた範囲にて、土器破片の集中を認める。土器破片の集中箇所に１号住居跡と付称し、検出状況を撮影。

11月 ６日：１号住居跡の精査を行う。当該範囲の調査区壁面に沿う形でサブトレンチを入れ、壁面の土層を観察。掘り込みの埋没に類する堆積を視認する。次いで、相対的にAs－Ｃ軽石の含有量が多い範囲を、移植ゴテにより徐々に掘り下げる。下位の泥炭質の自然堆積土が露出したところで精査を終了し、遺物出土状況を撮影。調査区内に４か所、試掘調査時のものと平行する位置にトレンチを設定。当該範囲内を 10 ～ 15cm 前後、下位のＶ層（泥炭質黒色土層）上部付近までジョレンで掘り下げ、遺構の有無を念押しで確認する。また、調査区北西部に位置する長径約 1.3ｍの落ち込みを、１号土坑として調査。

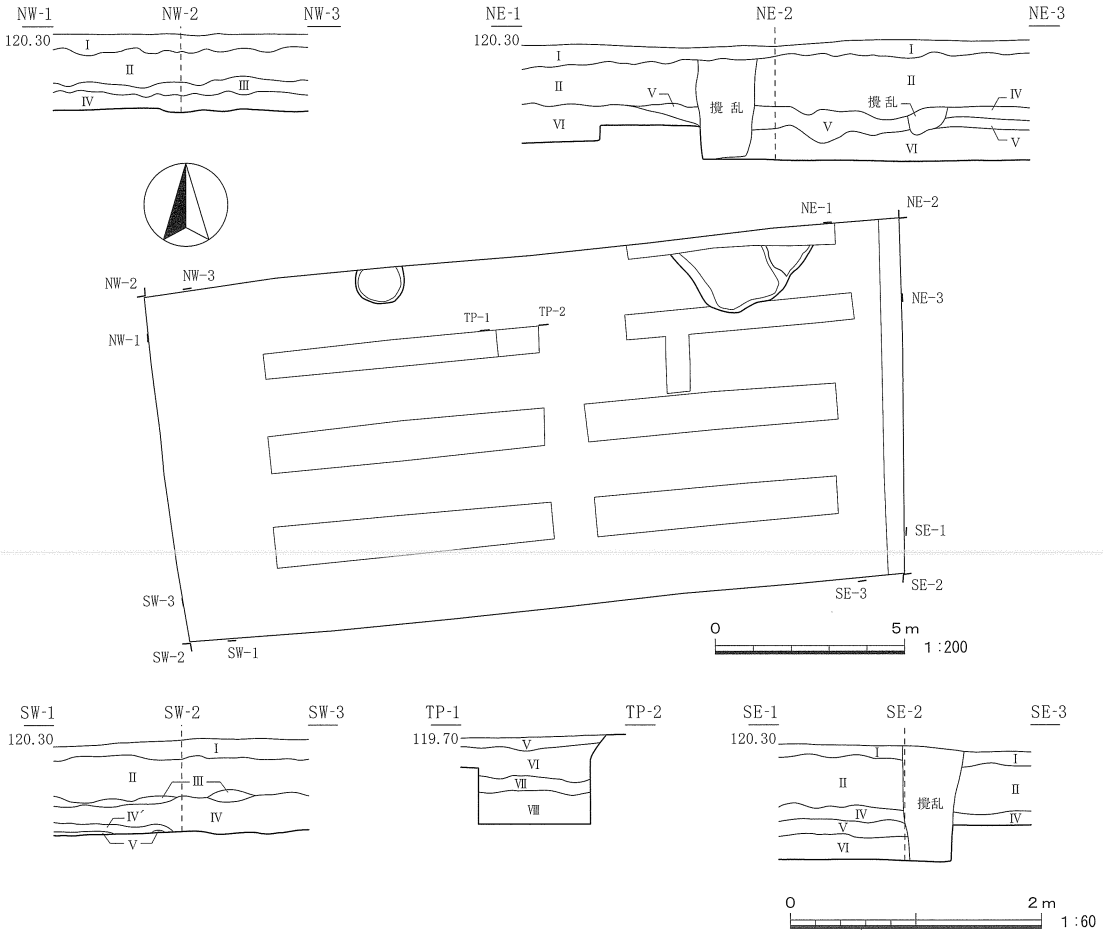
11月 ９日：１号住居跡関連の土器破片について、ドット上げを行う。全体清掃ののち、調査区全景を撮影。トレンチ掘削の結果、新規の検出はなし。発掘器材一式の整備と撤収、人力掘削の作業を完了する。トータルステーションによる調査区内全般の平面測量も終了。

11月10日：調査区壁面のセクション図を中心に、断面測量の残りを消化。発掘調査に関する作業のすべてを終了。

Ⅳ　基本層序

調査区の４隅において遺構確認面から表土に至るまでの堆積状況を、また調査区中央付近にテストピットを設け、遺構確認面以下の標準堆積土層のようすを、それぞれ観察・記録した。

確認面付近の旧地形は、北西から南東に向けてごくわずかに傾斜する。調査区北東部ではⅣ・Ⅴ層が一部消失しており、若干変則的な堆積状況を呈する。一方、調査区西部においては、As－Ｂの純層（Ⅲ層）が散在するほか、ＦＡ洪水層とおぼしき堆積（Ⅳ′層）が認められる。総じて本遺跡の土層は、榛名山麓南東端付近にして低地にほど近い微高地という地理的状況を反映したものといえよう。



Ⅰ層　暗褐色土：　表土。ゴミなどが少量混入。ふかふかの触感。粘性、しまりとも弱い。

Ⅱ層　暗褐色土：　As－Ｂ混土。Ⅰ層に似るが、より砂質を帯びる。

Ⅲ層　褐灰色土：　As－Ｂ純層。青灰色を呈する砂粒状の成分を中量含有。西部にて残存するほかは、ごく断片的に確認されるのみである。

Ⅳ層　灰黄褐色土：　白色軽石粒（径１～５㎜）を中量含む。しまりは強い。直下はＦＡの層準に相当し、調査区西部では、ＦＡ由来の軽石粒と浅黄橙色土からなる洪水層とおぼしき堆積（Ⅳ′層）が認められる。

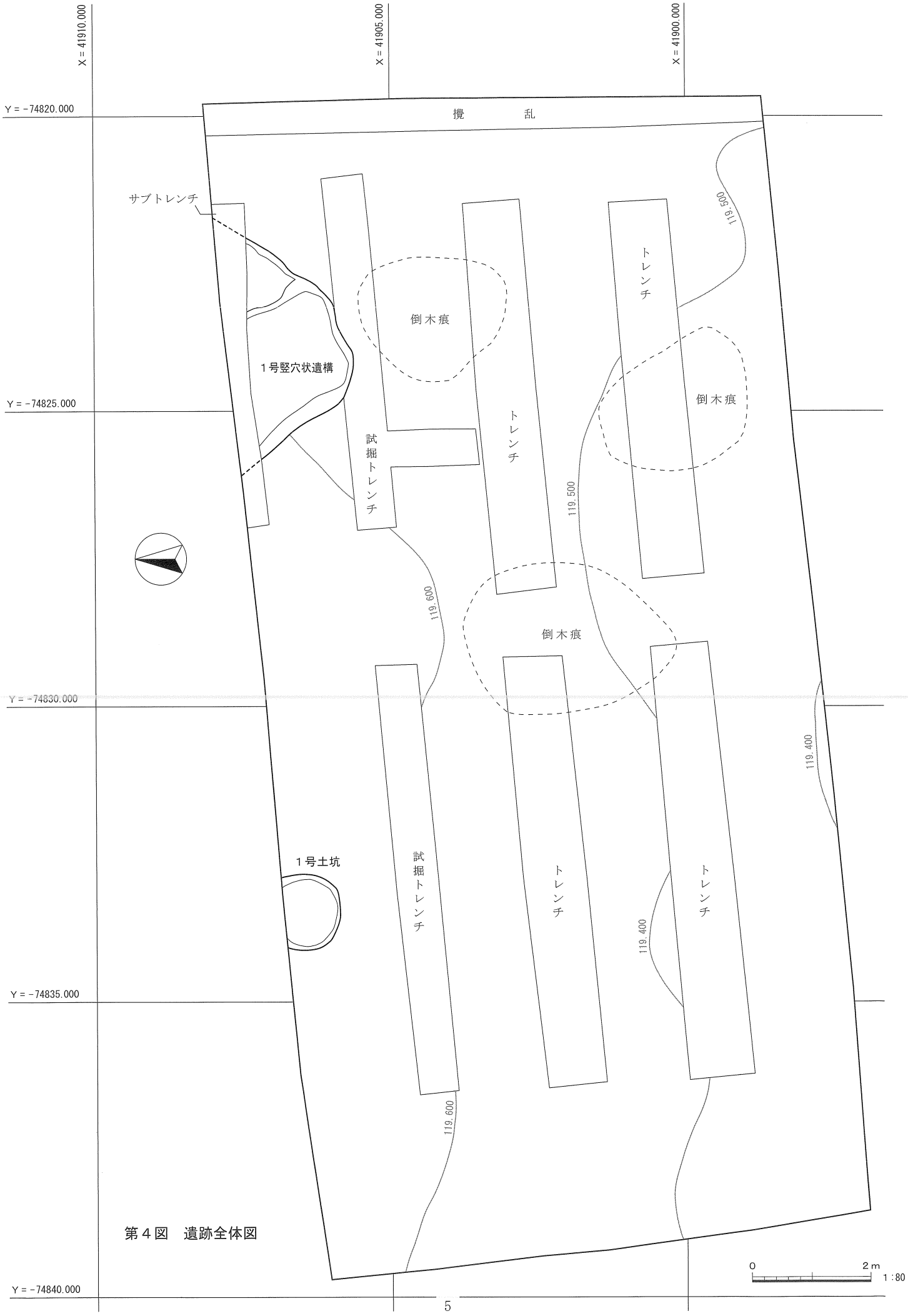
Ⅴ層　黒色土：　As－Ｃ混土。白色軽石粒（径１～５㎜）を少量含む。粘性、しまりともやや強い。この上部が、本調査の遺構確認面。

Ⅵ層　黒色土：　泥炭質土。白色軽石粒（径３～７㎜）および黄橙色の軽石粒（径３～７㎜）を少量含み、下部ほど多くなる。また、植物に由来する酸化鉄の沈着が随所に見られる。粘性がきわめて強く、しまりは普通。

Ⅶ層：　上下の中間的な様相を呈する漸移層。Ⅵ層でも見られた白色粒（径５～10㎜）と橙色粒（径３～７㎜）は、本層にて粒径と含有率を増す。ＹＰに由来する軽石粒か。

Ⅷ層　浅黄橙色土：　粘質土。いわゆる水成ローム。粘性強く、しまりは普通。

第３図　基本層序


X = 41910.000
X = 41905.000
X = 41900.000
Y = -74820.000
Y = -74825.000
Y = -74830.000
Y = -74835.000
Y = -74840.000
撹　乱
サブトレンチ
1号竪穴状遺構
倒木痕
試掘トレンチ
トレンチ
119.500
119.600
119.400
1号土坑
0
2m
1:80

第４図　遺跡全体図

Ⅴ　検出された遺構と遺物

今回の調査では、竪穴状遺構１基、土坑１基、および遺物計 105 点が検出・採集された。遺物は５世紀代（古墳時代中期）の土師器が大勢を占め、とりわけ１号竪穴状遺構 覆土中からの出土が目立つ。また、須恵器と中・近世の陶磁器が少量確認されている。

１．竪穴状遺構

１号竪穴状遺構　（遺構：第５・６図、PL.２ / 遺物：第６、８図、第２表、PL.３）

現地調査時に「１号住居跡」と付称していた遺構である。遺物の分布状況に有意な傾向が認められる反面、形状がやや不整である点、住居の床面および壁面とみなしうる要素を欠く点、加えて付帯施設が一切検出されていない点などを考慮し、本報告においては「竪穴状遺構」の呼称を用いることとする。遺構原図や写真に伴う標記、および出土遺物の注記には、「ＳＩ１」または「１号住居跡（１号住）」が用いられている。

位置：調査区北東部。遺構北東部に相当する約半分が、調査区外に位置する。 **重複**：なし。 **平面形態**：隅丸方形に近似する。 **断面形態**：検出状況において浅い皿状を呈する。 **規模**：調査区壁面で認識される長さ 4.4 m、最大深は 22cm を測る。 **主軸方位**：N－40°－W。 **底面の状態**：住居跡の床面に比して、起伏、あるいは細かな凹凸が多い。むしろ掘り方底面に類似の様相を呈する。遺構南西部に隅丸長方形のやや低い範囲があり、北東部はわずかに１段高くなっている。こうした小さな段差から、本遺構については２か所に細分される可能性もある。 **壁面の状態**：底面との境界に屈曲はなく、ゆるやかに立ち上がる。 **遺構埋没状態**：覆土は２層に分けられる。ともに基本層序のⅤ層に由来する土が主体で、Ⅵ層の土が少量混入する。人為の影響を積極的に示唆する事象は認められない。 **遺物出土状態**：調査区内の他所とは明らかに異なる高密度で分布し、とくに遺構南端部に集中する。ただし、検出時に本来の形状が分かる遺物はほぼ皆無で、小さく割れて四散した例の多いことが、接合状況からも推察される。 **時期**：遺物の製作年代である５世紀代、古墳時代中期におおむね属するものと考えられる。 **遺物**：土師器 65 点が検出された。上述のとおり、大半が小破片の状態である。挿図に、比較的残存率が良好な６個体を掲載した。

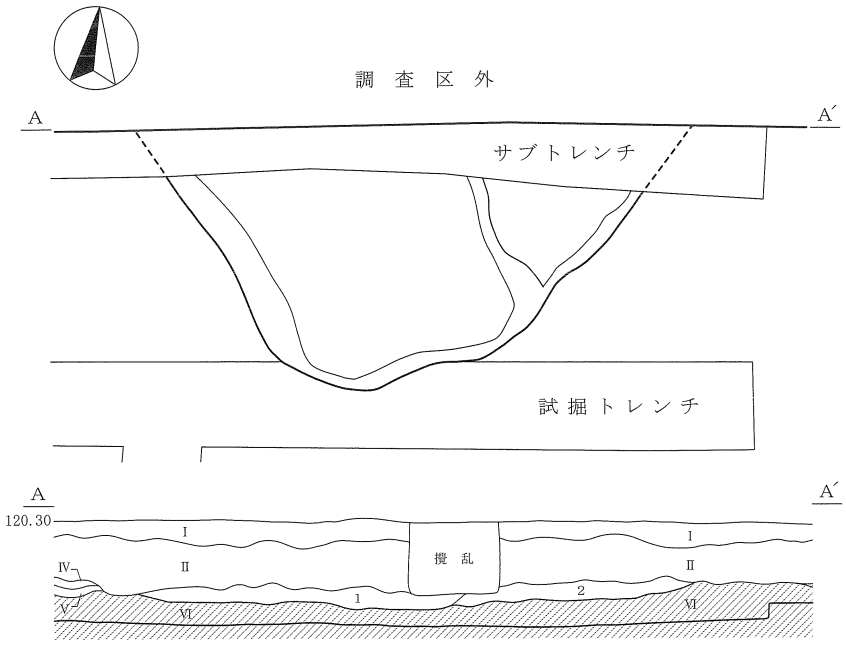
２．土 坑

１号土坑　（遺構：第７図、PL.２ / 遺物：第８図、第２表、PL.３）

位置：調査区北西部中央寄り。遺構北部に相当する４分の１弱が、調査区外に位置する。 **重複**：なし。 **平面形態**：おおむね円形。 **断面形態**：検出状況において浅い皿状を呈する。 **規模**：検出範囲において長径 1.3 m、最大深は 12cm を測る。 **主軸方位**：不明。 **底面の状態**：大小の起伏が認められる。 **壁面の状態**：ごくゆるやかに立ち上がる。 **遺構埋没状態**：覆土は単層で、基本層序のⅣ層に由来する土が主体で、Ⅴ層の土が若干量混入する。自然堆積とみられる。 **遺物出土状態**：後述の破片資料が１点出土したのみである。 **時期**：詳細は不明ながら、須恵器の破片が出土している点、覆土の特徴などから、１号竪穴状遺構より新しい時期の遺構と考えられる。 **遺物**：須恵器甕の胴部破片が検出された。残存状態による制約から、詳細な帰属時期の判定は困難である。

３．遺構外出土遺物

39 点が採集されている。特記すべき傾向は認められず、ごく散漫に分布していた。帰属時期をはじめとする内容の大半は１号竪穴状遺構の出土遺物に近似するが、中・近世の陶磁器の破片が少数含まれている。挿図には、比較的残存率が良好な８ないし９個体（２点について同一個体の可能性あり）を掲載した。



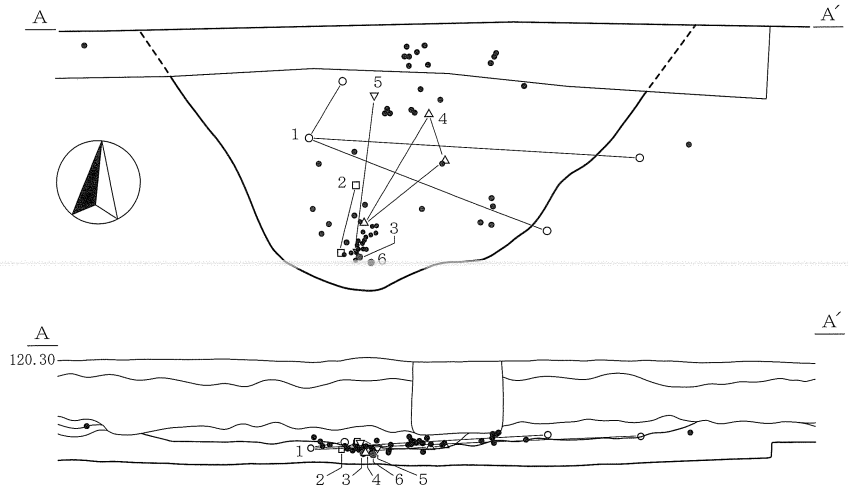
1号竪穴状遺構 土層説明

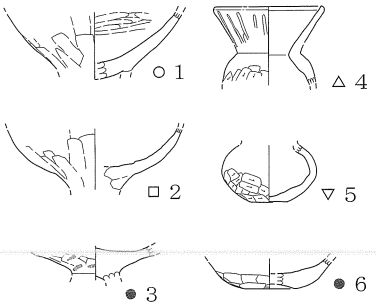
1．黒褐色土　白色軽石粒（径１～５㎜）を中量含む。粘性、しまりとも普通。

2．黒褐色土　白色軽石粒（径１～５㎜）を少量含む。粘性、しまりともやや強い。

0　2m　1:60

第５図　１号竪穴状遺構

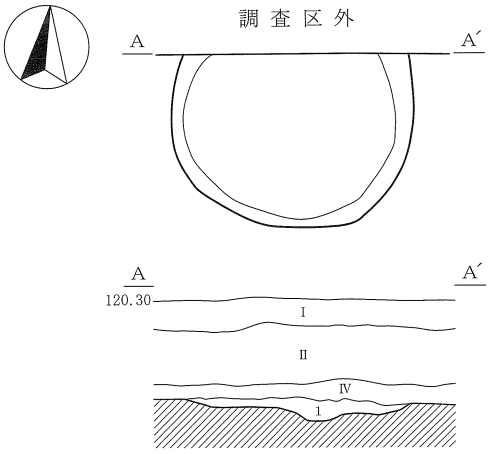




0　（遺物）　20cm　1:6

0　2m　1:60

第６図　１号竪穴状遺構 遺物分布図



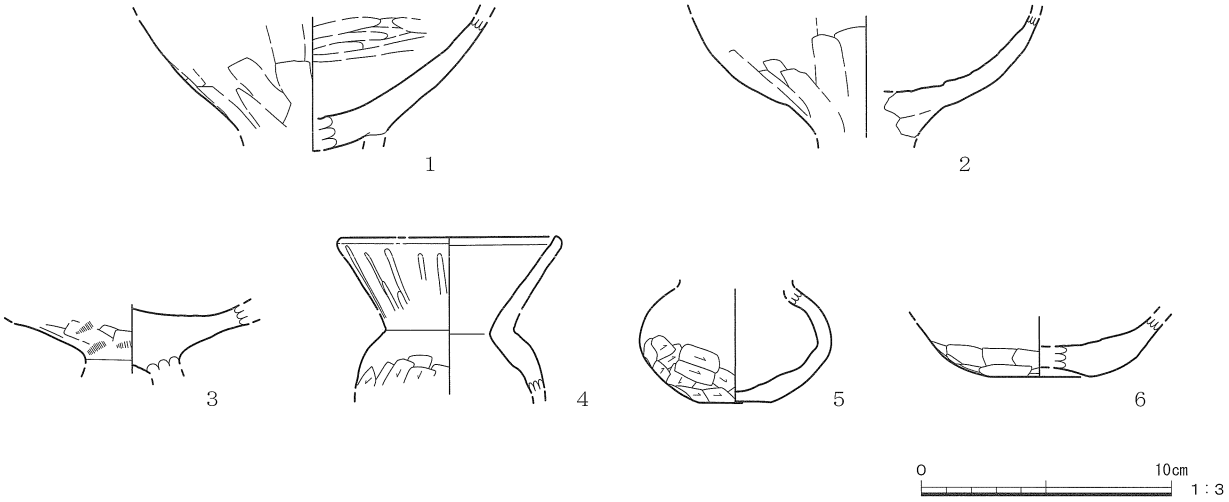
1号土坑 土層説明

1．黒褐色土　白色軽石粒（径１～５㎜）を少量含む。植物に由来する酸化鉄の沈着が認められる。粘性、しまりともやや強い。

0　1m　1:40

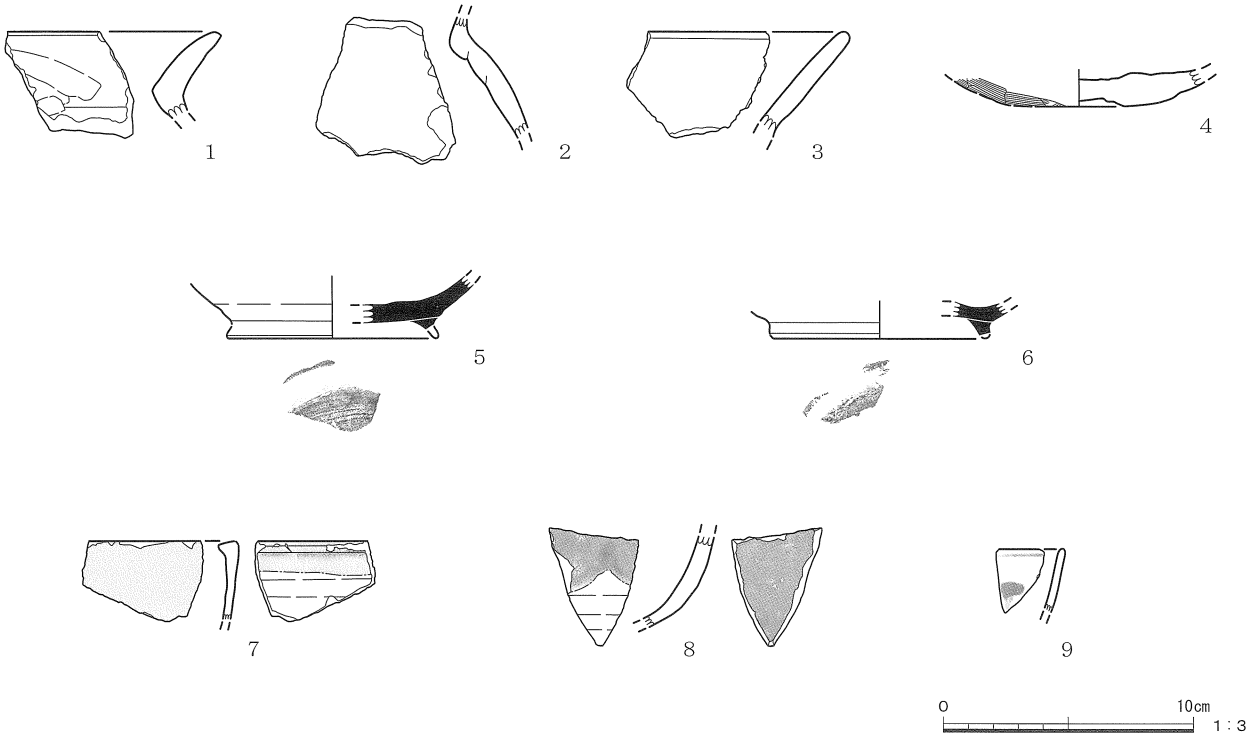
第７図　１号土坑

1号竪穴状遺構



1号土坑

遺 構 外



第８図　出土遺物

1号竪穴状遺構

番号	器種	法量（cm）	①焼成② 色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 高坏	口径 — 底径 — 器高 —	①普通 ②にぶい褐～黄褐色 ③白色粒・赤色粒・角閃石 ④坏部下半1/2	外面 坏部縦ナデ。 内面 横ミガキ。	底部～脚台部のくびれの直径は、推定5.5cm。
2	土師器 高坏	口径 — 底径 — 器高 —	①普通 ②橙色 ③白色粒・赤色粒・角閃石 ④坏部下半1/2	外面 坏部縦ナデ。 内面 ナデ。	底部～脚台部のくびれの直径は、推定3.7cm。
3	土師器 高坏	口径 — 底径 — 器高 —	①普通 ②暗灰黄～にぶい黄橙色 ③白色粒・角閃石・片岩 ④底部付近1/4	外面 縦ハケ、縦ナデ。 内面 ナデ。	底部～脚台部のくびれの直径3.7cm。
4	土師器 坩	口径(8.8) 底径 — 器高 —	①普通 ②黄褐色～黄灰褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部～胴部上半2/5	外面 口縁部縦ミガキ、胴部縦ケズリ。 内面 粗いナデ。	—
5	土師器 坩	口径 — 底径(2.8) 器高 —	①普通 ②にぶい黄橙色 ③白色粒・赤色粒・角閃石・片岩 ④胴部3/5	外面 胴部下半斜めケズリ。 内面 粗いナデ。	—
6	土師器 坩	口径 — 底径(4.0) 器高 —	①普通 ②にぶい橙～にぶい黄褐色 ③白色粒・赤色粒・角閃石 ④胴部下半～底部2/5	外面 胴部下半横ナデ。 内面 粗いナデ。	—

1号土坑

番号	器種	法量（cm）	①焼成② 色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	①還元 ②灰～黄灰色 ③白色粒・砂礫 ④胴部破片	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。	—

遺構外

番号	器種	法量（cm）	①焼成② 色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 坩	口径 — 底径 — 器高 —	①普通 ②黄灰～暗灰黄色 ③白色粒・赤色粒・角閃石 ④口縁部破片	外面 口縁部斜めナデ。 内面 粗いナデ。	2と同一個体の可能性あり。
2	土師器 坩	口径 — 底径 — 器高 —	①普通 ②にぶい黄橙～にぶい黄褐色 ③白色粒・赤色粒・角閃石 ④胴部破片	外面 ナデ。 内面 粗いナデ。 内面に粘土の接合痕。	1と同一個体の可能性あり。
3	土師器 坩	口径 — 底径 — 器高 —	①普通 ②にぶい黄橙色 ③白色粒・赤色粒・角閃石・片岩 ④口縁部破片	外面 口縁部ナデ。 内面 ナデ。	—
4	土師器 坩	口径 — 底径(3.6) 器高 —	①普通 ②にぶい黄褐～橙色 ③白色粒・赤色粒・角閃石・片岩 ④底面付近全周	外面 口縁部縦ハケ目、粗いナデ。 内面 粗いナデ。	—
5	須恵器 碗	口径 — 底径(8.4) 器高 —	①酸化 ②灰白色 ③赤色粒 ④底部1/5	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。 底面回転糸切痕。付け高台。	—
6	須恵器 碗	口径 — 底径(8.7) 器高 —	①還元 ②にぶい黄～灰白色 ③砂礫 ④底部1/6	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。 底面回転糸切痕。付け高台。	—
7	陶器 香炉	口径 — 底径 — 器高 —	①還元 ②灰白色 ③微細な砂 ④口縁部破片	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。 肥厚し、内面に向けやや張り出す口唇部。	内面口縁部付近および外面に灰釉。瀬戸・美濃系。
8	陶器 碗	口径 — 底径 — 器高 —	①還元 ②灰色（釉：黒色） ③微細な砂 ④体部破片	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。	内・外面に鉄釉。外面体部下半に無釉の範囲あり。瀬戸・美濃系。
9	磁器 碗	口径 — 底径 — 器高 —	①還元 ②灰白色 ③微細な砂 ④口縁部破片	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。	透明釉。外面呉須。肥前系。

第2表　出土遺物観察表

Ⅵ まとめ

三ッ寺・七窓遺跡が位置する井野川左岸（東岸）は、相馬ヶ原扇状地の西端に相当し、南東方向に向けて地形の大勢が低台地から低地へと変化してゆく端境のエリアであると同時に、古墳時代初期より水田経営が継続的に行われてきた地域としても知られている。本遺跡の基本層序を見ると、当該地がおりにふれ水に浸かりながらもロームの形成が行われた低台地の一端であることが確認できる。その点で、今回の調査結果が、以後継起するであろう近隣の調査において、遺跡立地を類推するための参考知見となれば幸いである。

検出された遺構は、竪穴状遺構と土坑の各１基にとどまるが、このうち１号竪穴状遺構は、古墳時代後期に比べて検出例が少ない中期の生活痕跡として注意を払うべき調査成果である。覆土中の遺物の出土状況は、住居の機能時や廃絶直後の一般的な様態を示しておらず、むしろくぼみが土によって埋まり始めてから器物が投棄された消息を物語るものと考えられる。遺跡の時期を問わず、低台地縁辺、集落の外縁部にして低地に臨む箇所では、土器破片をはじめとする遺物の集中地点を認めることがしばしばある。損壊を極めた住居跡、あるいは単なる落ち込みか、いずれにせよ１号竪穴状遺構が前記のような状況下で形成された一例に含まれる可能性を示して、結語に代えたい。

主要参考文献

群馬県史編さん委員会　1990『群馬県史 通史編１原始古代１』群馬県

高崎市市史編さん委員会　2000『新編高崎市史資料編２ 原始古代Ⅱ』高崎市

高崎市市史編さん委員会　2003『新編高崎市史通史編１ 原始古代』高崎市

箕郷町誌編纂委員会　1975『箕郷町誌』箕郷町教育委員会

高崎市教育委員会　2009『全徳森遺跡 －宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査－』高崎市文化財調査報告書第236集

高崎市教育委員会　2009『上芝・西金沢遺跡 －店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－』高崎市文化財調査報告書第250集

高崎市教育委員会　2009『下之城・村東遺跡３ －共同宅地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－』高崎市文化財調査報告書第252集

「第１表 周辺の遺跡一覧表」（２頁）に記載された遺跡の文献　＊各文献冒頭の番号表示は、表中の遺跡No.と同一のものを用いている。

1　**三ッ寺・七窓遺跡**（本報告）

2　『保渡田Ⅱ・中林遺跡』1982 群馬町教委 /『中林遺跡調査概報』1983 群馬町教委

3　『三ッ寺Ⅰ遺跡』1988 群馬町教委

4　『三ッ寺Ⅱ遺跡』1991（財）群埋文

5　**三ッ寺Ⅲ遺跡**『三ッ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳』1985（財）群埋文

6　**保渡田遺跡**　5と同じ

7　『保渡田東遺跡』1986 群馬町教委

8　『保渡田八幡塚古墳』2000 群馬町教委

9　**保渡田薬師塚古墳**『保渡田Ⅶ遺跡』1990 群馬町教委 /『足門寺屋敷Ⅲ遺跡・三ッ寺大下Ⅴ遺跡・保渡田薬師塚古墳』2004 群馬町教委

10　**保渡田Ⅶ遺跡**『保渡田遺跡群第Ⅶ次(1)』1989 群馬町教委 /『保渡田Ⅶ遺跡』1990 群馬町教委

11　**井出二子山古墳**　3と同じ

12　『井出地区遺跡群』1992 群馬町教委

13　**北畑遺跡**『井出地区遺跡発掘調査現地説明会資料』1998 群馬町教委

14　『道場遺跡群』1989 高崎市教委

15　『井出村東遺跡』1983 井出村東遺跡調査会

16　『同道遺跡』1983（財）群埋文

17　**高田・館遺跡**　14と同じ

18　**浜川高田遺跡**『浜川遺跡群』1998（財）群埋文

19　**浜川館遺跡**　18と同じ

20　『矢島・御布呂遺跡』1979 高崎市教委 /『御布呂遺跡』1980 高崎市教委

21　『芦田貝戸遺跡』1979 高崎市教委 /『芦田貝戸遺跡Ⅱ』1980 高崎市教委

22　『西浦北遺跡』1989 群馬町教委

23・24　**熊野堂Ⅰ・Ⅱ遺跡**『熊野堂第三地区・雨壺遺跡』1984（財）群埋文 /『熊野堂遺跡(1)』1984（財）群埋文 /『熊野堂遺跡(2)』1990（財）群埋文 /『熊野堂遺跡(Ⅰ)』1991（財）群埋文

25　『大八木屋敷遺跡』1995（財）群埋文

26　『融通寺遺跡』1991（財）群埋文

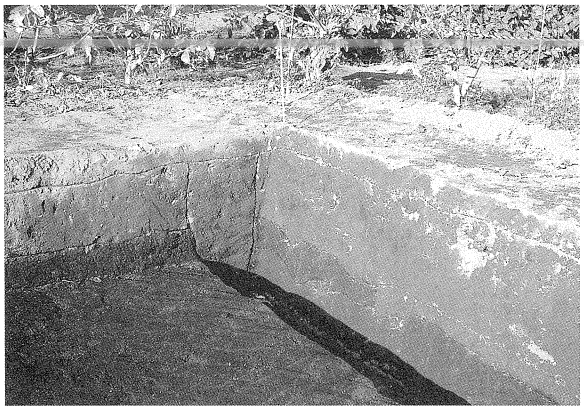
27　**雨壺遺跡**『熊野堂第三地区・雨壺遺跡』1984（財）群埋文

28　『西浦南遺跡』1988 群馬町教委

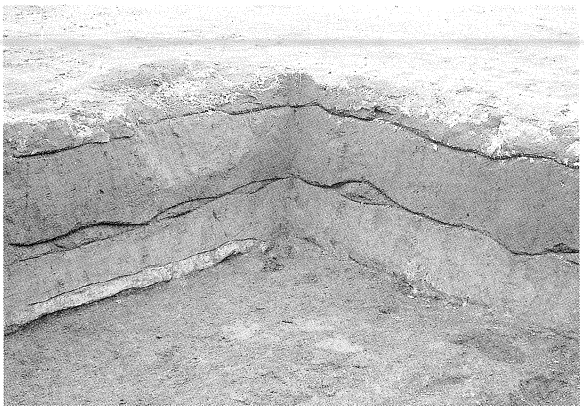
29　『大八木箱田池遺跡』1983 高崎市教委 /『大八木箱田池Ⅱ遺跡』1983 高崎市教委

写　真　図　版

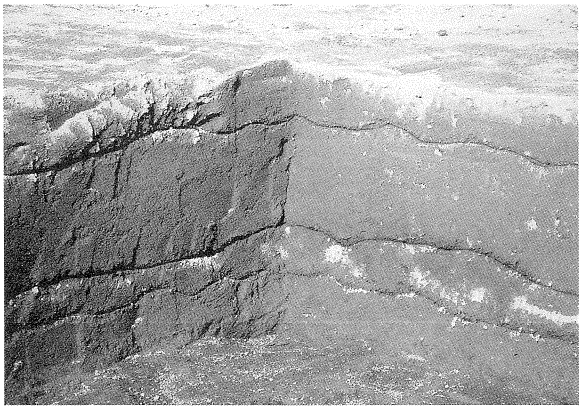
調査区全景（西から）



基本層序（調査区北東隅、南西から）



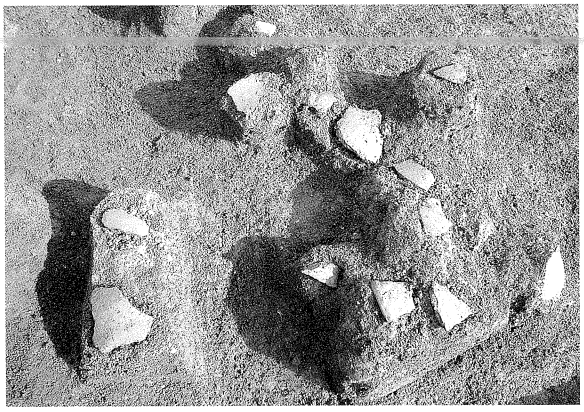
基本層序（調査区南西隅、北東から）



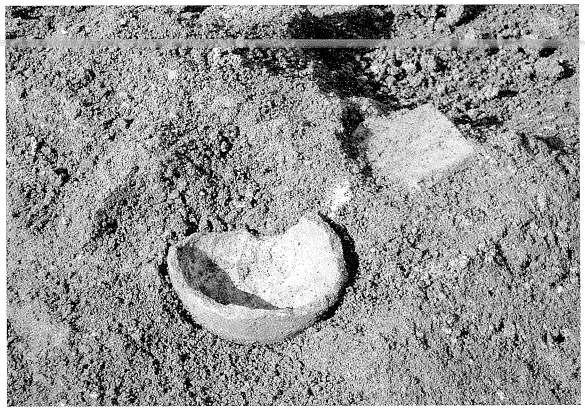
基本層序（調査区北西隅、南東から）

基本層序（調査区中央テストピット、南から）

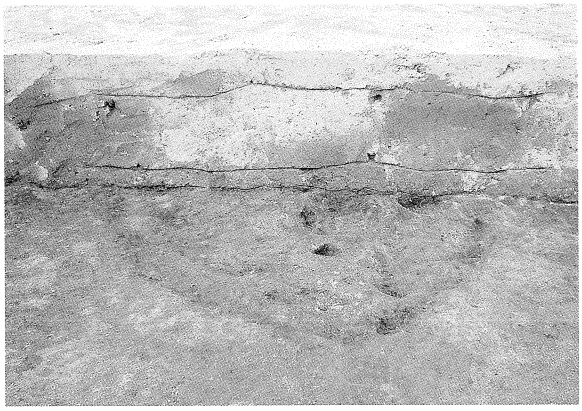
1号竪穴状遺構（南東から）



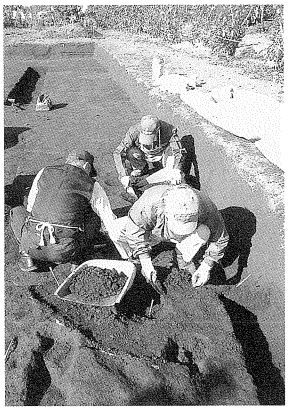
1号竪穴状遺構 遺物出土状況(1)（南西から）

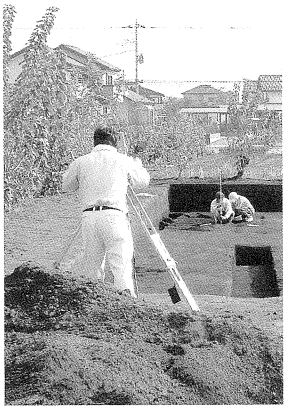


1号竪穴状遺構 遺物出土状況(2)（南東から）



1号土坑（南から）





作業状況

1号竪穴状遺構

1

2

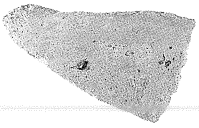
3

4

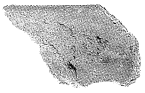
5

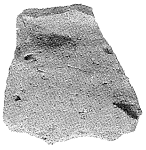
6

1号土坑


1

遺構外


1

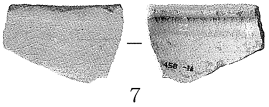

2

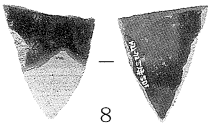
3

4

5

6


7


8

9

出土遺物

報告書抄録

フリガナ	ミツデラ・ナナマドイセキ
書名	三ッ寺・七窓遺跡
副書名	共同宅地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第266集
編著者名	田口一郎　和久拓照
編集機関	高崎市教育委員会 〒370-8501 群馬県高崎市高松町35番地1　TEL 027-321-1292
発行機関	高崎市教育委員会
発行年月日	平成22年4月30日

所収遺跡名	所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
三ッ寺・七窓遺跡（みつでら・ななまどいせき）	群馬県高崎市（ぐんまけんたかさきし）三ッ寺町字七窓（みつでらあざななまど）988番地1の一部、988番地2	102020	458	36°30′88″	139°03′88″	2010.11.03 ～ 2010.11.10	177.76 ㎡	共同宅地建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三ッ寺・七窓遺跡	集落	古墳時代	竪穴状遺構　1基	土師器	古墳時代中期の集落跡の外縁部か。
			土坑　1基	須恵器	

高崎市文化財調査報告書第266集

三ッ寺・七窓遺跡

－共同宅地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

平成22年4月23日印刷

平成22年4月30日発行

編　集／高崎市教育委員会

発　行／高崎市教育委員会

印　刷／朝日印刷工業株式会社